
撻

カルパッチョ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

撻

【Zコード】

Z3208D

【作者名】

カルパツチヨ

【あらすじ】

「二十歳になればこの集落からは出でていけない」そんな撻がある集落に住む一人の青年、山崎恭介は撻の真意を探ろうとする。やがて恭介は不思議な声を耳にする。その声の主の正体とこの集落の撻の関係・・そして恭介の両親の死の真相・・長老達が隠している集落の秘密とは・・

この集落には昔から一つの掟があった。二十歳になると同時にこの集落からは一步も出でてはいけないという掟が。その掟を除けばとてもいい場所ではあった。だがこの掟だけが人々を苦しめていた。他の地域より毎月定期的に食料は届けられる。普通に生きていく分にはここから出なくても困らない。だが、掟はいかなる場合でも出る事を許さない。大人になればこの集落に生まれた者は外の世界とは隔離された空間でしか生きていけないのだ。そして今年二十歳になる一人の青年は集落の長の家へと駆け込んでいた。

「なぜ、こんな掟があるのか聞かせて欲しい」

「・・私もそれは知らん。この掟は・・百年以上前から続いているからな・・」

「本当は知ってるんだろう?・・この集落には何か秘密でもあるのか?」

青年は長に向かい怒鳴っていた。考えてみればこんな掟おかしいのだ。何故二十歳になれば集落の外に一步も出る事を許されないのだろうか。青年はこの掟があることに關して何らかの秘密がこの集落にあると考えていた。だがそれを誰に聞いても答えてくれない。皆、知らないとかそんなものはないと言つだけだ。

「教えてくれ、この集落には何がある?・・俺達に關係していることなのかな?」

「秘密などない。・・掟はこの集落を存続させるためのものだ。それ以外の理由などない」

長は怒鳴りながら言つた。この集落の存続のために作られただけだと。都會に入々が移住することのないようにしているだけだと。だが青年は見逃さなかつた。青年が理由を聞いた時に長が困つていたのを。ちゃんとした理由があるのなら困る必要など無い。やは

りこの集落には何かがあるのだ。青年は立ち上がり、長の家を後にする。青年の名前は山崎恭介。父親と母親はすでに他界している。親戚からは事故だと聞かされているが噂では両親は捷を破ろうとしたため殺されたとも言われている。

「恭介」

「・・秀一か。どうかしたのか？」

長の家の前で声をかけてきたのは恭介の幼馴染もある上田秀一。秀一も恭介と同じような考え方を持っているが、長に文句を言つたりしたら親に何を言われるか分からないので言つたくても言えない状況が続いている。

「こここのところ毎日だね、恭介が長の家に行くのは「俺は真実を知りたいんだ。おの捷がなぜ作られたのかを」それが間違つていることなのだろうか。そう、恭介が思った時、どこからともなく声が聞えた。

『あなたは間違つてないよ』

明らかに男の声ではなかった。小さい女の子のよつな声だ。秀一は少し声が高いが、そこまで高くはないはずだ。恭介は周りを見渡した。しかし、恭介の周囲には秀一しかいなかつた。きょうきょろとしていると秀一が声をかけてくる。

「どうかしたの？」

「さつき声が聞えなかつたか？・・小さい女の子の」

「僕は聞えなかつたけど・・気のせいじゃないの？」

秀一はそう言うが恭介は確かに聞いたのだ。ぼんやりと聞えたなんて言うレベルではない。はつきりと聞えた。まるで頭の中に直接響くような声だった。その後恭介は秀一と分かれ自分の家に戻る。そして、家の中で一人あの声が言つていたことを思い出してた。

「間違つていないか・・

あの声はまるで恭介の考へに答えるかのよつに聞えてきた。偶然にしては不自然だ。だがあの時は誰も傍にいなかつた。もし、あの声の主が元々見えない存在だとしたらどうだろ

か。恭介はまだ知る由も無かつた。この集落に隠された重大な秘密と淀の真意を、そしてその淀によりたくさんの犠牲が過去に払われたことを・・

あの声を聞いてから一日が過ぎた。恭介はこの田も長の家を訪ねようとしていた。だがそこで信じられない事を聞く。

「・・秀一が・・死んだ?」

恭介は耳を疑つた。この集落は大自然の中にある。四方を山で囲まれているのだ。その山の中でも秀一が死体で発見されたらしい。その山は本来二十歳になれば立ち入ることすら禁じられる場所だ。秀一は何をしに山の中に行つたのだろうか。恭介は長の家へと駆け込んだ。

「・・あんたに聞いても無意味だとは思つが・・聞くぞ。秀一は殺されたのか?」

「何を物騒なことを・・。こんな場所で殺人事件など起るはずもない」

「なら、自殺か?」

長は答えない。恭介は長の家の柱を思い切り殴り走つて出て行く。一体何が起つたのだろ。うか。あれだけ親のためにも撻を守ろうとした秀一が何故山の中にいたのだろうか。恭介は秀一の家へと向かう。そこには秀一の遺体と秀一の両親がいた。

「山崎君か・・」

「秀一は・・どうして山の中に・・」

秀一の父親は分からぬと言つた。何故撻を破るような事をしたのか。そんなことは両親にさえ分からぬのだ。だが父親はこの一日間秀一の様子がおかしかつたと言つ。誰もいないのに一人でぶつぶつと呴いていたらしい。

「おじさんは・・撻について何か知っていますか?」

「分からぬよ。・・ただ破つてはいけないことだとしかね」

それはこの集落の人間であれば誰もが知つてゐることだ。恭介は

秀一の家を出てから急に怖くなってきた。秀一が自殺したとは考えにくい。ならば誰かに殺されたということになつてくる。その理由は恐らく捷が関わつてくるだろう。ならば次に恭介が殺されてもおかしくはない。そんなことを考えていると、またあの声が聞えていた。

『大丈夫よ・・あなたは殺されないわ・・』

「・・何なんだよ・・お前は」

『私はあなたの味方・・ううん、この集落を守る者・・』

恭介は頭を振つた。変なことを考へてゐるから聞えもしない声が聞えてくるのだ。何も考へなければいい。秀一の事も事件だとすればそれでいいぢやないか。それが一番自然だ。だがそこでふと気になる。秀一はどの方角の山の中にいたのだろうか。この集落の四方は完全に山で囲まれているが、その中で南側の山だけは誰であらうと入ることを禁じられている。まさか秀一が倒れていたのは南側の山ではないのか。

『やつと氣づいたみたいね・・教えてあげるわ・・彼が倒れていたのは南側の山よ』

「・・南側・・」

恭介は声を信用することが出来ず、秀一の両親に尋ねた。秀一はどこで発見されたのかを。

「・・南側の山の入り口付近だそうだ・・。それがどうかしたのかね?」

「いえ・・なんでもないです」

恭介は身震いをした。秀一はいつも口では捷を破るつもりはない、それが両親のためにもなると言いながらも何かを掘んでいたのではないだろうか。そして禁じられ区域に入ろうとした。そしてそこで殺されたのだ。この集落の秘密を守りつゝする何者かに。恐ろしい話だが、ありえないことではない。

「秀一・・お前は何を知つたんだ?」

その答えは返つてくることは無かつた。だが確かに秀一は何かを

掘んでいたに違いない。それも他者に伝えてはいけないよつな情報。

「・・教えてくれ・・誰かを犠牲にしてまで守るべき事なのか？」
だがその質問にあの声が答えることはなかつた・・

親友の死から一日が過ぎた。たつた今葬式が終わった所である。恭介は空を見上げていた。結局秀一の死は事故死ということに付けられた。だがその事故の原因や詳細は告げられていない。恭介の叔父が言うには恭介の両親の時もこんな感じだったらしい。秀一の両親は原因究明を求めてなどいないし、皆納得していた。一部の人間を除いて。その大きな原因是秀一が倒れていた場所だ。誰もが立ち入りを禁じられている場所、南側の山。そこに秀一は倒れていた。立ち入り禁止の理由はよく知らないが、そこには悪霊等がよく出ると言われている。だから皆、事故死などとは思つていなかつた。秀一がいつ山に入ったかは分からぬ。

だが、この数日の間雨は降つていない。土砂崩れが起きる可能性はまずない。考えるのは木の上から転落して亡くなつたということだが、秀一は木登りは苦手だつた。わざわざ進んで木を登つたとは思えない。もし、木に登る必要があつたのなら話は別だが。葬儀場にいるほとんどの者が悪霊に憑かれたのだと囁いていた。

「・・秀一が・・あんな場所に行つたとはな・・

「信じられないな・・俺は」

恭介の隣にいつのまにか青年が立つていた。恭介と秀一の共通の友達である、小谷正平。かなりの変わり者として知られている。その理由は集落の長の一族でありながら捷に批判的な人間だからだ。そのためか、長からはかなり嫌われているらしい。血の繋がつた家族でありながら毎日口論ばかり。正平の口癖は俺の家族は捷に縛られている古い腐つた人間だよである。

「・・残された時間は少ない・・つてことか・・

「え?」

思わず聞き返してしまつ。とても意味深な発言であつた。だが正

平はとぼけた顔をしている

「お前も気をつけろよ、恭介」

「そう言って葬儀場を後にする。今の言葉は何を示していたのだろうか。

『・・・一つ忠告するわ。・・次に犠牲になるのは彼よ

「冗談は止める。・・秀一みたいなことがまた・・起こるなんて・・

『・・・言つてたでしょ、彼。残された時間は少ないって』

恭介はばかばかしいと思った。秀一の偶然だ。また同じようなことがもう一度起こるなんて、信じたくない。正平も消されるとどうのか。一体誰が何のために。そんなことは起こるはずはないと思いつながらも不安になってきた。正平だつて狙われる理由はある。それに正平自身さきほどの発言は危機を感じているからなのではないだろうか。

「どうすればいい？・・どうすれば・・助けるんだ？」

『彼が南側の山に入るのを止めることがね。それが一番良い方法よ』
南側の山。声はそこでまた何かが起こるという。それを止めるためにはあの山に入る前に正平を止めるしかない。この日の夜恭介は南側と集落との境目にいた。正平を止めるためにである。今日かどうかは分からぬが、今日では無いとも言いきれない。時刻は午後十一頃ほど。とんどの者が寝静まつた頃、一つの人影が動いていた。ゆっくりと南側の山へ向か歩いていく

「待て、正平」

動きが止まつた。恭介は懐中電灯で人影の方を照らす。そこには正平がいた。正平はまるでいたずらが見つかったかのような子供の顔をしている。だがこれはいたずらなんていう生易しいものではない。

「教えてくれ、この山の中に何がある？」

「恭介・・お前は知らない。・・いや、知らない方が幸せだ」

「お前も秀一も何を知っている？」
「何がある？」

問い合わせたが、正平は答えない。ただ黙っているだけだ。知らない方が幸せ。よほどひどいものなのだろうか。正平は山に向かおうとする。それを恭介は全力で止めた。いかせるわけにはいかない。

「止めるな、恭介。・・俺は・・秀一や今までの犠牲者の魂を救う「お前・・何を・・」

正平は全力で恭介を振り払い。恭介が立ち上がるより早く正平は山の中へと消えていく。追わなければいけない。そうしなればまた消えてしまう。だが、恭介は立ち上garことは出来なかつた。まるで何かの意思が恭介を拒むかのようにして。

「犠牲者の魂を・・救う?」

秀一や今までの犠牲者。それらに共通するのは何か。一つしか思い浮かばなかつた。集落の 捕だ。正平は切羽詰つてingかのようだつた。昼間の発言と言い、今の様子といどもおかしい。一体何が起こつてingのだろうか。何が彼をここまで追い込んでいるのだろうか

『・・追いなさい。そうすれば・・あなたは全てを知ることになる「追う? そんなことをしても殺されるだけだ・・』

『もう誰も犠牲にはならなわ。彼が最後の犠牲者になる・・』

声は今夜一つの事に関しては決着かつくと言つ。小谷正平という人物を犠牲に。だがそれで 全てが終わるのではない。正平では全てに終止符を打つことは出来ないと声は語つた。

『全てを終わらせるのは・・あなたしかいないのよ、恭介』

『・・俺が全てを終わらせる?・・何を終わらせるんだ?』

恭介は山を見上げた。声は言つた追えば全てを知る事になると。恭介は少し躊躇つたが、やがて躊躇を振り払い、山の中へと入つていく。この集落の秘密、両親の死の真相。親友が死んだ理由。様々な謎の真実を知るために恭介は声を信用し先に山の中へと消えていった正平を追つことにした・・

四話

「血？」

暗い山道を歩いていると、血の匂いがしてきた。それも少しではない。

はつきつと分かるほど匂いだ。一体この先で何が起こっているのだ

ろうか。恭介は慎重に少しづつ前へと進んでいく。やがて誰かが倒れていっているのが見えた。

「正平・・・

「・・恭介・・か

右腕の部分から血を流して倒れている正平がそこにいた。正平の

少し後ろには一本の刀が落ちていた。その刀の刀身も血で真っ赤に染まつて

いた。まだ意識はあるようだ。今からでも誰かを呼んでくれば助かるかもしない。だが正平はそれを拒否した。

「もう長くは・・もたん

「何があつたんだ?」

「・・恭介・・もうこれ以上犠牲者は出ないはずだ・・。もう何も心配

することはない

途切れ途切れで正平は語る。今夜ここであったことを。それは恭介の

想像を絶するものだった。正平は今夜ここでも自分の命を懸け、戦いを

挑んだ。古くから集落の秘密と撻を守るために全力をつくした者達に。

「・・・秀一の死からだ・・・俺が・・・彼らを殺そつと計画したのは・・・」

最初の一、三人は樂だったと正平は言つた。彼らは長の仲間だからだ。

長の孫である正平のことを疑つ者は誰もいなかつた。だが仲間が討たれ

たことで彼らも反撃に移つた。結局全員を討つことは出来たものの正平

も傷ついた。

「だが・・・間違いだつた・・・全ては・・・彼らが正しかつた・・・」

「正平?」

「・・・恭介・・・に・・・げろ・・・も・・・う・・・おし・・・ま・・・い・

だ」

恭介は正平の名を何度も口にした。だが正平が返事をすることはなかつた。一体正平は何が言いたかつたのだろうか。逃げる、もうお終い

だ。正平が途切れ途切れに口にした言葉からはとても切羽詰つている

状況が窺える。正平が秀一を殺した連中を倒しそれで終わつたのでは

ないのか。気になるのは正平が彼らが正しかつたと言つたことだ。

『・・・恭介、もう時間は少ないわ・・・』

「時間?」

『また悲劇は繰り返されるのよ・・・』

声は一方的に語り続けた。悲劇は繰り返される。またたくさんの

犠牲

者が出る。そしてじばらく経てばそれは終わりを告げ、一部を除き皆

がその恐怖を忘れる。そんなことを繰り返していた。何が始まるとい

うのだろうか。恭介は正平の遺体と共に山を降りていく。そして長の

家へと向かつた。長は起きていた。もう真夜中だといふのに。まるで

今夜何が起こるかをはじめから知っていたかのようだ。

「・・恭介よ・・私を許してくれとは言わん・・だが今から語ることは

全て事実だ・・どうか聞いてくれ」

長は語り出した。この集落と捷の秘密を。この集落が出来たのはそん

なに昔ではないらしい。今から半世紀ほど前のことのようだ。ここに

集落が出来たのには一つの理由があった。

「生贊のためだよ・・古くから災いをもたらす化け物の・・な

「生贊?」

「その化け物は生贊を出せば他の者には手を出さないと言つたそうだ」

そして国は仕方なく、数十世帯をこの地に移り住ませた。事実は全て伏せて。そして悲劇は起きた。人々は何も知らず日々を過ごしていた。だがある日突然集落の中で次々と人が消えていった。何の前触れもなく。集落は混乱し、人々はここから出て行くしかないと決断した。そしてこの集落から人々が姿を消すと、化け物は暴れ出した。

「化け物は・・人を喰つことで生きているらしい・・。それも大人だけ

だ。二十歳未満には被害は昔から出でていない・・」
やがて集落の一部の人は自分達さえ我慢すれば大勢の人間が助かると考え出した。そこで生まれたのがあの捷だ。生贊がこの集落にい

る限り化け物が暴れ出すことはない。結局は一部の人間が犠牲になるしかない。だがもちろん反対者は出た。そこで当時の長は集落から出て行こうとする者を全て死に至らしめた。それで人々に恐怖を与え、ここから出る事のないようにしたのだ。そして化け物は十年ごとに人々の大半を喰らつていった。

「まさか・・今年が・・」

「そう。・・今年は前に生贊が喰られてから丁度十年だ」

悲劇は繰り返される。長もそう言った。もう誰も止めるることは出来ないと。一度始まってしまえば後は時が経つのを待つしかない。山の中に眠る化け物が満足するまで。恭介は長の家を後にした。このまま何も出来ずにただ悲劇が終わるのを待つしかないのか。

『・・一つだけ方法はあるわ』

「・・教えてくれ・・一体なにをすれば止める?」

『・・南側の山の中に小屋があるはず。・・そこにまずは行きなさい』

恭介は声の指示通りに動いた。幸い、小屋はすぐに見つかった。正平が倒れていた地点から少し登った所に小屋はあった。その小屋の中に恭介は入る。その小屋の中には鎖で完全に封じられている棺桶があった。そこに何が入っているのかは容易に想像出来る。この集落を長い間苦しめてきた化け物だろう。

『・・封印を解きなさい・・。それでこの集落は救われる』

『・・集落の外はどうなる?』

『・・もうそんなもの・・ないのよ』

恭介は耳を疑う。集落の外が無い。それはどういうことなのだろうか。恭介の目の前に突然鏡のようなものが現れた。そこに写し出された光景は荒れ果てた大地だった。とても人が住めるような環境とは思えない。他の生物が生きているかどうかも疑問だ。

『これが・・この山の向こうの世界・・』

『・・ばかな・・化け物は生贊だけで満足してたはずじゃ・・』

『あの長は全てを知らないわ。・・以前集落の人間がここを出した時に化け物はこの集落以外の人間を全て抹消したのよ』化け物とこの集落の人々との間に交された約束。それはこの集落に生きる全ての人間が化け物の生贊となること。その約束は一度破られた。化け物はその際にその代償として他の地域の人間を一人残らず滅ぼしたという。恭介は戸惑っていた。鏡の向こうに広がる世界は悲惨なものであった。確かに外があのような状況であれば、解放しても構わないだろう。だが何かおかしいのだ。何かが引っかかる。何かが腑に落ちない。何かが矛盾している。あまりにも不自然すぎる。

『何を躊躇うの？躊躇う必要なんて・・』

「・・おかしいんだ・・」

『おかしい？』

「化け物がここに封印されているのなら・・長が言つていたようなことは起ころばずが無い・・」

恭介は声に聞いた。何者だと。この声の正体は犠牲者でもなければこの集落の人間でもない。最初かに恭介を利用していただけであり、この集落を助けるつもりなどなかつた。恭介は小屋の床に散らばっていた一本の棒を手にする。それで鏡を打ち破る。

「これも全て幻のはずだ。・・お前は一体・・」

『もう隠しても無駄つてことね・・』

恭介は身構えた。小屋が白い光に包まれ、そして恭介の前に白い塊が現れる。それが声の正体であろうか。恭介はその塊を睨んでいた。今なら分かる。これこそが全ての元凶だと・・

「秀一を殺したのも・・正平を殺したのも全てお前か」

『・・そうよ。あの二人は邪魔だから殺したの』

恭介の中に怒りが満ちていく。声は語つた。何故二人を殺したのかを。秀一の方は簡単であった。化け物が封印されていることを知り、化け物の封印されている箱ごと移動させようと考えたのだ。そうすればこの集落は救われると信じて。声にとつてそれはまずかった。そんなことをさればどうしようもない。だから殺すしかなかつた。秀一の体に憑依し、自殺させた。だがそれが原因となり、正平が動くことになる。秀一に憑依したことでほとんどの力を使い果たしていた声はどうする術もなかつた。だから、声は彼らを利用した。恭介と同じように彼らに語りかけ、正平と戦わせた。

「・・もう力は残つてないんだろ?」

『あなたには何も出来はしないわ。あなたは何の力も持つていらないもの』

「ああ・・そうだな」

それでも諦めるつもりはない。全ての元凶が目の前にいるのだ。こいつを倒せば全て終わる。秀一や正平達の死だつて無駄にはならないのだ。

「・・俺の両親を殺したのも・・お前か?」

『あなたの両親は知らないわ・・私もある頃はまだ実体があつたからね。そんなことをする必要なんて無かつた』

結局両親の死の真相は分からぬままか。恭介は少し残念に思えた。恭介はそれが一番知りたかった。両親は何故死ななければいけなかつたのかを。だがこの化け物でさえそれを知らないのだ。

「撻を作らせたのもお前・・か」

『 そうよ』

「・・撻を破つた人達を殺したのも・・」

『 私よ。・・まだ実体がある時は全て消していだわ。跡形も残さずに、ね』

だから秀一達の遺体はあつたのか。秀一や正平はそうしたくても出来ない事情があつたのだ。誰がやつたかは分からぬが、化け物の実体は封印され、魂だけがこの山の中に漂う形となつたからだ。恭介は棺桶を見ていた。あの鎖を解き放てば、化け物は再び蘇るのだ。魂だけの存在となつた化け物は誰かを利用しないと復活することはもう出来ない。だがこのまま放つておいても根本的な解決にはならない。

「もう俺に憑依する力はないようだな・・」

『 ・・無いわ。そんな力があるんならとつぶに憑依してるもの』

力ずくで誰かに憑依し、封印を解くなんてことはもう出来ないのだ。秀一に憑依した時にほとんどの力を使い果たしている。だが声は笑つていた。いずれはまた力は戻ると。力さえ戻れば誰かに憑依も出来ると。恭介を利用したのは早く復活がしたかったからだ。だがそれにこだわりすぎたせいで、少々面倒なことになつていて。

『 だが・・記憶を消す程度の力はまだある・・』

「・・記憶・・を消す?」

『記憶を消してもう一度あなたを利用すればいい
今度はあの二人はいないもの』

邪魔者はない。もう一度最初から行えば今度は成功する。声は正平を追わせた所で失敗をおかしていったのだ。声の計画では小屋の中で彼らが争っているはずだつた。だから、声は正平が死のうとしていることを恭介に告げ、正平を追わせた。しかし、そこで誤算は起きた。正平は最初から見抜いていたのだ。だから小屋の中では戦わなかつた。声の計画を崩すために。しかし、もう正平はこの世にはいない。

『私を仲間と思わせるためにはどうしてもああ言つしかなかつた・・でもそれが失敗の原因となるとはね・・』

力がまだあれば、あんな事はせずに済んだ。秀一を憑依した時に、数分憑依が保てるような状況なら自殺などさせずに封印を解いた。だがあの時すでに声の力は弱まつていた。数秒しか保てなかつたのだ。だから秀一を自殺に追い込んだ。秀一と正平の存在はことごとく、声の計画を狂わせた。

『・・記憶をここで消せば・・もう一度始めからやり直せば・・私の計画は・・』

「そうはさせん」

突如小屋に低い声が響いた。恭介が振り返るとそこには居るはずのない人物がいた。

「・・父さん・・どうして・・」

小屋の入り口に立つていたのは死んだはずの恭介の父親山崎拓郎であつた。

「・・恭介、お前は長の所へ。・・私が時間を稼ぐ

恭介は頷き走り出していた。拓郎は化け物の魂の

前に立つ。

「・・あの者の両親は死んだはず・・
「・・やはり気づいていないようだな、知能の低い
化け物は」

拓郎は床に落ちている棒を拾い殴りかかつた。本
来ならば魂が痛みを感じることなどない。だが声
は確かに痛みを感じていた。

「・・まさか・・」

「貴様の力が弱つた原因・・それは恭介にある
集落の全ての人々の命を守るため、恭介達の最後
の手が打たれようとしていた・・

「今まで騙していて悪かつたわね・・・恭介」

「母さんまで・・・一体・・・これは・・・」

恭介が長の家へ向かうとそこには恭介の母山崎零がいた。幽霊などではないだろう。だが、両親は恭介がまだ小学生辺りの頃に死んだはずだ。それが何故生きているのが不思議だ。

「・・・隠すためだ・・・化け物からお前の力を」

「俺・・・の力?」

「この集落に隠された秘密の一つ・・・それがお前なのだ」

長は語った。化け物を封印した一人の赤ん坊の話を。拓郎と零はこの集落で生まれた者ではない。拓郎も零も國お抱えの靈能力者だった。その主な仕事は各地にいる悪霊化け物を退治すること。この集落に潜む化け物の力は恐ろしいほど強かつた。国はこの集落を犠牲にし国家の安全を確保使用としたが、数人の者はそれは別に行動を起こした。そして派遣されたのが零と拓郎である。この二人とまだ赤ん坊だった恭介がこの集落に現れ、化け物に戦いを挑んだ。しかし、恭介と零の力でさえ、化け物には勝てなかつた。だがその戦いの最中、奇跡は起きた。化け物が二人を葬ろうとした時、まだ赤ん坊だった恭介が化け物と二人の間に割つて入った。そして化け物は苦しみ出し、あの棺桶の中へと封印

された。

「私達夫婦は・・悪靈を退ける力を持っていたのでも・・あなたが使ったのは悪靈を封じる力だつた。それままだ赤ん坊の子がね」
零と拓郎は自分達では勝てなかつたがこの子ならと思い、自分達が死んだと偽り、恭介の存在を隠そうとした。化け物は今まで恭介が自分と戦つた靈能力者の息子とは全く気づいていなかつた。

「そして・・化け物は私達の読みどおり、あなたを利用しようとしたわ・・」

拓郎達の作戦はそこでもう成功を迎えていた。化け物の魂は恭介と接触した。それにより化け物の力はすぐに弱くなつた。秀一と正平の死を回避できなかつたのは残念だ。しかし被害は最小限で済んだ。

「・・案ずるな、恭介。正平や秀一・・そして他の犠牲者達も奴を討てば戻つてくる」

「・・本当か?」

長も零も頷いた。化け物の魂さえ討てば全ては終わる。そしてそれが出来るのは恭介しかない。赤ん坊の時であれだけの力を出せたのだ。今であれば倒せるはずだ。

「・・恭介・・本当はこんなことをさせたくないけど・・今この集落を救えるのはあなただけなの」

「分かつてるよ。・・やるしかないんだ」

少しでも可能性があるのならやつてみるしかない。やらなくてはいけないのだ。今までの犠牲者を救うためにも。恭介は覚悟を

決めていた。秀一達だって自らを犠牲にしてまでやり遂げようとしたのだ。ここで退くわけにはいかない。恭介達が山を見上げた瞬間、小屋の辺りで爆発が起きた。

「・・父さん・・

「悪靈が集まつてきているわ・・無理やり取り込むつもりよ・・」

化け物が悪靈達を呼び集め、無理にでも自分の中に取り込もうとしているらしい。恭介は気づけば走り出していた。ここで拓郎を見殺しにすることなど出来ない。そのころ、拓郎は悪靈を取り込み力を得た化け物の魂相手に苦戦していた。

「・・それがお前の最終手段か・・」

『盲点だつたわ・・あの子があなた達の子供だつたとはね・・。それにあなた達が生きていたとは・・』

拓郎は笑っていた。このままでは死ぬだろう。あの時は零がいたから生き延びれたのだ。相手が全力では無いとはいえ、明らかに押されていた。だが恐怖など感じなかつた。まして悲しみなどない。ただあるのは勝利の確信だけである。自分がここで消されても恭介さえ無事なら勝てる。拓郎は全てを息子に託した。

『そんな棒で何ができる?』

「何もしないさ。ただ・・お前の中から悪靈を削るだけだ」

棒が白い塊の中に入り込んでいく。だ

が以前と異なり化け物の魂が痛みを感じることはない。今回は悪霊達が盾となつているからだ。だが拓郎の狙いはそこにあつた。化け物の魂を殺せないにしても、悪霊を削ることくらいは出来る。

『・・せつかく手に入れた力だ・・そう易々と手放しは・・』

「もう遅い！」

化け物が拓郎に攻撃する前の僅かな一瞬で拓郎は化け物の魂と同化した悪霊の一部を払いのけた。その後、化け物の攻撃が拓郎を直撃する。拓郎は飛ばされ数m先の地面に叩きつけられた。

『・・くつ・・』

また力が減つていく。せつかく集めた悪霊も三割程度が消えた。拓郎の意識はまだある。だが拓郎に憑依しても結果は同じだ。拓郎や零は悪霊の憑依に対して抵抗する術を持っている。

『ここにいるのが貴様でなければ・・』

山の斜面を誰かが走つて登つてくる。拓郎はその姿をみて安心した。恭介は拓郎が手にしていた棒を拾い上げる。

『・・そのような武器で私は倒せない・・そんな貧弱なものではつ・・』

「・・やつてみないと分からぬだろ」

恭介は集落を救うため。そして犠牲者達を救うために化け物の魂に立ち向かつて行つた・・

『・・目障りだ、お前のような存在は』

白い塊から白い光が刃となり飛んでくる。恭介はそれを回避した。恭介の少し後ろでは零と拓郎が見守っている。二人は化け物の限界が

近いことを知っていた。攻撃に鋭さが無くなつて来ている。

「・・倒すつていつても・・一体どうすれば・・」

「ぶつければいい。お前の全ての力を」

ただそれだけで消滅するはずだ。恭介はとりあえず近づこうと思つた。

この棒をあの塊の中に差し込んで力を注ぎ込めばいいのだ。つた。ただ、その力を注ぎこむ方法も恭介は知らないのだが。とりあえず何とかやつてみるしかない。

「お前を倒せば全て終わるんだ」

『・・私を倒して全てが終わる?笑わせるなつ』

恭介は塊に近づいた。だが黒い霧のようなものが体にまとわりつく。

「・・な、なんだ・・これは・・」

悪霊が体にまとわりついていた。振り払おうとするが上手くいかない。

『私をお前のような未熟者が倒せる訳がない』

恭介が悪霊を振り払うために、腕を必死に振つていた。その時、零と拓郎

は信じられない光景を目にした。悪霊達が浄化されていくのだ。

恭介の腕

の動きに合わせて。それは零や拓郎の戦い方とはまったく別のものだった。

一人は悪靈を浄化させるのではなく、討ち滅ぼす。だが、恭介は滅ぼすの

ではなく、浄化させ、ただの靈体にしているのだ。それだけではなかつた。

一部の浄化された靈体が恭介の力となつている。

「私達の子供とは思えないわね・・この力・・」

「ああ。俺達とは全く正反対の力の使い方だ・・」

二人とも驚いていた。自分達とはまったく別の力の使い方。それもかなり

の技術を要するはずのものだ。それを恭介は無意識の内にやつてのけてい

る。恭介は無我夢中で棒を振つていた。自分にまとわりつく悪靈を払いのけるために。

「・・何が化け物だ・・今となつてはただの弱い奴じやないか。人間一人殺せないのか、お前は」

『許せないわね、その言葉』

悪靈が消える。化け物がそう指示したのだろう。恭介の狙い通りだつた。

恭介は挑発したのだ。悪靈を消させ、一対一で戦うために。化け物はそ

の挑発にまんまとまつてしまつた。悪靈と協力していればまだ勝ち目

はあつたが、挑発され怒りで我を忘れてしまつたのだ。判断能力を失い

勝機すら捨ててしまつた。恭介は白い塊めがけて突進していく。もう恭

介の進路を塞ぐ悪霊はいない。恭介の手の中に棒が塊の中へと突き出され

れる。そこから大量の力が無意識の内に流れ出て行く。化け物はその力

に抗おうとした。無駄であると知りつつも、最後の抵抗に出た。

『・・消えるの？・・私が・・』

「消えろ、化け物。・・お前が消えれば全てが終わる」

最後まで化け物は抵抗した。流れ出てくる恭介の力を由らの物にするた

めに必死で抵抗していた。だが、その抵抗も一分ほどで終わった。

白い

塊は光となり、消えていった。恭介は地面に座り込んだ。雫と拓郎の二

人が駆け寄る。

「終わつたようだな・・」

「ええ・・よく頑張つたわ、恭介」

だが返事は無かつた。拓郎と雫は恭介の顔を見て笑う。極度の緊張から

解放されたためか、恭介は安心しきつた顔で寝ていた。

「・・家まで運びましょつか」

「そうだな」

拓郎と雫の二人は恭介を連れて、山を降りていった・・

八話

恭介が集落を救うために化け物と戦つてから数日が経過した。過去の犠牲者達も山の中で発見された。どうやらあの化け物が人を喰つてい

たというのは人々の勘違いだったようだ。あの化け物は人々の魂を自らの中に取り込むことで力を得ていたらしい。化け物が消えたと同時に魂を抜かれただけの人は戻ってきた。だが秀一や正平のようになると殺された者達は戻つてこなかつた。それでも恭介はこれで良かつたのだと

思つていた。あの一人の死が無駄になることはなかつたからだ。「これでこの集落は救われたな・・あの撃も無効となるわけだ」拓郎は恭介の隣に座りながらそんなことを言つていた。化け物がいな

くなつた今、撃など守る必要はない。だが拓郎と零はこの集落で生活することを決めたらしく。恭介は仕事はどうするのかと尋ねた。すると拓郎は笑いながら答えた。

「もう俺達は引退だ。ここで俺達は暮らす。お前は・・外の世界を見たい

んだろ?」

恭介は頷いた。この集落は確かにいい場所だ。それでもずっとここで

生活するのは嫌だ。もっと広い世界が見てみたい。秀一達の分まで。

今、集落が平和を取り戻したのはあの一人の力があつたからだ。

恭介

一人でやり遂げたのではない。といつより恭介はもう少しで化け物の

復活を手伝つとこりであった。

「・・俺は行くよ。ここ之外で暮らしたい」

「頑張れよ、恭介」

一人がそんな会話をしていると、雲がやって来て、恭介に長が呼んで

腰掛けた。恭介はすぐに長の家へと向かう。雲は拓郎の横に

けた。

「これでやつと・・私達の仕事は終わつたわね・・」

「ああ。長かつたが・・」これでようやく終わりだ

そのころ恭介は長の家で長の話を聞いていた。どうやらお礼が言いた

いらしい。だが、お礼を言われるようなことはしていない。

「・・俺は何もしてません」

「謙遜する事はない。君が今回の事件を解決したのだ」

秀一達がいなければ声の正体は見抜けなかつた。あの鏡を見せられた

時に、長の話を聞いていれば、矛盾には気がかなかつた。今回は

恭介

は周りの人間に助けられたのだ。

「もうここでは悲劇など起こらんよ・・そうであつてほしい・・」

それは長だけの願いではなかつた。この件の真相を知る全員がそう願つていた。ここではもう悲劇など起こらない。どうかそうであつて

ほしい。ここが風景に似ているのどかな集落であつてほしい。あ
んな

不可解な失踪が多発するような悲劇はもう起きて欲しくはない。
それから一週間が過ぎた。集落には平穏の日々が戻ってきていた。
もうこの場所で悲劇に怯え、暮らす必要などない。恭介は友人二
人の

墓の前に立っていた。彼らに別れを告げ、恭介は集落を出て行く。
この場所にもう一度とあんなことが起こらないように願つて・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3208d/>

掲

2010年10月8日15時36分発行